

## 「アルダスゲイト」解釈をめぐって<sup>1</sup>

——岩本論文をきっかけとして——

藤本 満

### 1. 「アルダスゲイト」解釈の推移<sup>2</sup>

●初期の伝記 アルダスゲイト体験を、信仰生涯にとっての分水嶺としての回心体験、またメソジスト運動の起点と解釈するような方向付けは、まずウェスレーの没後、様々に出版された伝記によって確定された。1792年のトーマス・コークやヘンリー・モアによるウェスレー伝、1793/96年に2巻にわたって出版されたジョン・ホワイトヘッドによるもの、あるいは1870年に3巻本として出版されたルーク・タイアマンによるもの、とウェスレー伝のボリュームは大きくなっても、「アルダスゲイト回心」こそ、ウェスレー生

涯の分水嶺として決定的キリスト体験である、と描き方は一貫していた<sup>3</sup>。

●リバイバリズムの影響 19世紀に詳細に解説される「アルダスゲイト回心」の解釈には、いつしか米国リバイバリズムの回心劇が読み込まれていったことは確かである。そこでは、アルダスゲイト以前のウェスレーの信仰生活が律法的で、前クリスチャン的なものであるということ、また回心の体験が「不思議に心が燃える」意識的な体験であるということが強調され、ウェスレーのアルダスゲイト体験が回心劇の模範のように語られた<sup>4</sup>。

●神学的究明 20世紀に入って、ウェスレー神学研究が盛んになるにつれ、アルダスゲイトを単なるウェスレーの個人的回心の出来事として捉える以上に、神学的な解釈が整うようになる。ウェスレー神学のプロテスタント原理を明確にしようとしたセルの *Rediscovery of John Wesley (1935)* はアルダスゲイト回心とその前後の出来事をルター的な信仰義認の視点から解釈した。

1937年、ベルギーの司祭ピエトは、ウェスレーの神学を英国におけるプロテスタント潮流から聖化を中心としたカトリック的潮流への移行であると位置づけて、ウェスレーの回心を1725年とすることも提唱されたが、ピエトが提示したウェスレーの全体像があまりにカトリック的であったため、かえってプロテスタント信仰原理によってウェスレーを見ていくという方向付けが確定したと言えよう。翌年(1938)、英国のラッテンベリーは *The Conversion of the Wesleys* を著し、チャールズの1738年5月21日の福音的な回心体験と並べることによって、この月の両者の福音的回心こそ、メソジスト運動の土台になったことを強調した。またラッテンベリーは、1738年3月5日から4月23日に、ウェスレーがロンドンでモラビア派のペーター・ベラーと詳しく会談したことを分析しながら、神学的な回心はその時期に、そしてそれらの神学的納得を体験したのが24日であることを丁寧に解説した。

<sup>3</sup> とはいえ、ウェスレー伝の進展にも様々な推移や論争がある。詳しくは、Richard Heitzenrater, *Elusive Mr. Wesley*, vol.2., 168–207)。

<sup>4</sup> H.H. Smith, “BC and AD in John Wesley”, *Methodist Quarterly Review* 79:713–15; B.P. Raymond, “Wesley’s Religious Experience,” *Methodist Review* 86:28–35。

<sup>1</sup> 本稿は、著者が2005年9月のウェスレー・メソジスト学会で2004年の岩本助成氏の論文「オールドダースゲイト再考」『ウェスレー・メソジスト研究』5(2004)(教文館)をきっかけに、アルダスゲイト解釈に関する論争について発表させていただいたものである。その発表に少々手を加えて、ここに掲載することを許して下さった学会員諸氏のご理解に感謝する。

<sup>2</sup> アルダスゲイト解釈の概論として、Randy Maddox, “Aldersgate: A Tradition History”, in *Aldersgate Reconsidered* (Kingswood, 1990)や、Kenneth J. Collins, “Twentieth-Century Interpretation of John Wesley’s Aldersgate Experience: Coherence or Confusion”, *Journal of Wesleyan Theological Society* (1984)など。この問題は、清水光雄『ウェスレーの救済論—西方と東方教会の統合』(教文館、2002年)、21–23でも触れられている。

1946年には、キャンノンが **The Theology of John Wesley: with Special Reference to the Doctrine of Justification** を著し、アルダスゲイトの福音的回心を中心に彼の神学を体系づけた。その後の興味深い研究としては、ドイツ敬虔主義の研究家マルチン・シュミットは、ルターに等しい霊的苦悩をウェスレーのジョージア滞在の日記から描き出し、その心理的な動きを追いかけながら解説し、やがてアルダスゲイトにおいて信仰的苦悩が解消されていく過程を明確にした(1962)。さらに **V.H.H.グリーン**によるオックスフォード時代の若きウェスレーが霊的なナルシズムの中に苦闘していた心理状況を分析した (1964)。

約 20 年かけた研究は、アルダスゲイトを単なるリバイバル主義的な回心劇から、ルターと比較される、長い年月を経た信仰的・神学的苦悩を伴った福音的回心であるという解釈を神学的に深めることになった。一般の人びとがアルダスゲイトを見る目は、依然として前者であったかもしれないが、少なくともウェスレー研究者は後者の理解に立つようになっていった。

●アルダスゲイト 225 周年 さて、こうした流れに変化が起こったのは、アルダスゲイト 225 周年にあたる 1963 年であった。この時期、すでに新しい全集(「**Oxford Edition**」、後に「**Bicentennial Edition**」)の作業が始まっており、漠然としたウェスレー像や資料ではなく、歴史的に正確な資料を追求し、それらを批判的に研究する土壌ができつつあったと、マドックスは評している (p.144)。**Boyd Mather** や **Gerald Kennedy** は、米国メソジストはキャンプミーティング的なリバイバル主義の回心劇をアルダスゲイト体験に重ねてきた現実を指摘し、そのような解釈が敬虔の修練を常に強調してきたウェスレーの神学と実践とに相容れないものであると批判した。**Theophil Funk** は、アルダスゲイト後も続いたウェスレーの霊的苦悩を日記から分析。アウトラーは神学を抜きにした霊的体験としてアルダスゲイト理解を批判し、それがウェスレーにとってはるかに知的なものであったことを確認した。またフランク・バーカーは、1770年にウェスレーが当時の日記に注を付けて、若干の修正を施していることを指摘した<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> Maddox, p.144–45. Boyd Mather, “John Wesley and Aldersgate 1963,” *Christian*

●アウトラーによる方向性 このように始まった従来のアルダスゲイト解釈の修正要素の一つにまとめたのが、1964年のアウトラーによる **Library of Christian Classics** シリーズの **John Wesley** であろう。その後、最も読まれるウェスレーのアンソロジーとなった本書で、アウトラーは伝統的・単一的なアルダスゲイト解釈に、以下のような修正を試みている。

1) ウェスレー神学の実質は、アルダスゲイト以前のオックスフォード・メソジスト時代に培われ、その体験以降も引き継がれているという点で、アルダスゲイト以前のウェスレーを切り捨てずに、ウェスレー神学の実質の一部として研究対象とすべきこと。

2) アルダスゲイトは、キャンプミーティングのような切り離された瞬間的な信仰体験ではなく、前後に神学的理解の深化と発展が伴っていたこと。モラビア派の回心体験をしながらも、神学的には国教会に立ち戻っていくこと。つまり、福音的回心は心情的にも一日の体験ではなく、長期の信仰的葛藤と成長を通ったこと。

3) アルダスゲイト後、信仰の弱さを感じてヘルンフォートの赴き、やがてブリストルの野外説教(メソジストの誕生)で、確信を求めたアルダスゲイト体験が完結すること(むしろアウトラーは、こちらのブリストル体験をウェスレーの信仰生涯にとっての「分水嶺・watershed」と称している)<sup>6</sup>。

4) すなわち、1738年5月24日の一日を分水嶺として、ウェスレーの生涯を二つに分けるのではなく、ウェスレーの霊的「体験」という意味では、神への献身を明らかにした1725年の「オックスフォード回心」と1739年のブリストルでの野外説教体験を含めるべきこと。

---

Century 80:1581–83. Gerald Kennedy, “Aldersgate and 1963,” *Christian Century* 80: 677–78. Theophil Funk, “John Wesley nach ‘Aldersgate,’” *Der Evangelist: Sonntagsblatt der Methodistenkirche in Deutschland* 114: 267. Frank Baker, “Aldersgate 1738–1963,” *Duke Divinity School Bulletin* 28: 67–80. Albert Outler, “Beyond Pietism: Aldersgate in Context,” *Motive* 23: 12–16.

<sup>6</sup> Outler, op.cit., p.17; Frank Whaling, *John and Charles Wesley* (Paulist Press, 1980) p.23; 拙著『ウェスレーの神学』(福音文書刊行会、1990年)54頁。

●後期ウェスレーに注目 その後、アルダスゲイトの解釈に際して、アルダスゲイト 250 周年(1983)に至るまで目立って新しい展開はなかったが、特筆に値するものがあるとすれば、2つ挙げなければならない。第一に、1972年のハイツエンレイターの博士論文である。初期ウェスレーの速記による日記の読解に成功した彼は、より詳細にオックスフォード・メソジストの活動を再現し、それがこれまでの想像以上に、後のメソジストの源泉となっていたこと、また彼らの神学が、ルターにとっての中世後期の救済論のように、非常に複雑なものであったことなどが明らかにされた。

第二に、アルダスゲイト 250 周年を迎える前に、決定的な衝撃を与えたのは、**Bicentennial Edition** の第1～4巻(説教集)を発行にあたって、一卷の冒頭に記されたアウトラーの序文であった。彼はウェスレーの説教 **1-150** を分析する中で、〈初期ウェスレー〉(1725-1738)・〈中期ウェスレー〉(1738-1765)・〈後期ウェスレー〉(1765-1791)という3区分を提唱した(1985年)<sup>7</sup>。後期ウェスレーにあつて、特に特色的と思われる強調点は、①従来の救済論を中心とした教理を土台に、社会的・実際的な問題を論じる説教が神学者ウェスレーの主たる関心事となつていったこと、②1770年にホイットフィールドの遺言でウェスレーが召天記念説教をして以来、カルヴァン派との対立が激化し、その対立の中で、ウェスレーは信仰義認以上にクリスチャン生活(holy living)に関してさらに広く深く神学思考を展開していった点である。

アルダスゲイト解釈を考えると、特に②の点は大きな意味を持っている。カルヴァン派は自らを「evangelical」と称して、ウェスレーとメソジストをカトリック的、あるいは律法主義的と激しく非難してきた。こうして「信仰至上主義」に走って信仰義認に一边倒になつてしまった「福音主義」にどれほど嫌気がさしていたのか、次のことばにそれがよく現れている。

「私は、〈福音説教〉と雑に呼ばれているものよりも、良き気質・良き業についての説教の方がはるかに益があると観ています。昨今この名称は、単なる呪文に成り下がっています。我々のソサエティーでは使ってほし

くない意味不明の言葉です。常識も恵みも知らない口先達者な自己満足の者たちが、キリストとその血と信仰による義認を少々口にする、聴衆は『何とすばらしい福音説教だ』と感嘆する。放っておけばよろしい。勿論のことメソジストは、キリストについてあのようなには習わなかったはずで。罪からの救いということが起こらない福音など、我々は福音とは呼ばない」(手紙 to Mary Bishop, 1778.10.18)。

信仰義認が誤った方向に展開した信仰至上主義・アンチノミアンに対する警戒は、アルダスゲイト直後にはツインツェンドルフとの会話の中で、その後も説教の序文などでもなじみのように、終始一貫してウェスレー神学の問題意識の中心にあつた。しかし、1765の説教20「主、我らの義」、そして1770年以降のカルヴァン派との論争の中で、ウェスレーは、義認以前の善き行いについても、アルダスゲイト直後のような徹底した否定的な評価を取り下げるようになる。著者は、1986年の論文で、「後期ウェスレーにおける善き行いと義認との関係について」詳しく論じたことがあつた<sup>8</sup>。

●アルダスゲイト 250 周年記念 さて、アウトラー序文が世に出て3年後の1988年にアルダスゲイト 250 周年記念を迎えたとき、225周年記念以上に、伝統的な福音的回心、分水嶺としてのアルダスゲイト体験に対する批判は高まった。その急先鋒はジェニングスであつた。彼は回心体験としてアルダスゲイトに突出した意義を与えることは、敬虔の修練を一貫して強調し、ordo salutis という一連のたましいに対する神の働きかけを説き、教会的・社会的関心事にあふれているウェスレー神学を歪めることになるというのである<sup>9</sup>。そして、もしウェスレーの信仰生涯の分水嶺となる「回心」と呼ぶのにふさわしい出来事があるとしたら、1725年であつて、1738年ではないという。

マドックスはジェニングスの他にも、この年、伝統的アルダスゲイト解釈に異議を唱える人物として、Michael Weyer, John Lawson, J. Braian Selleck, John Vickers を挙げている。いずれもプレ・アルダスゲイトとポスト・アル

<sup>8</sup> 拙論 *John Wesley's Doctrine of Good Works* (dissertation, Drew University), pp.251-261.

<sup>9</sup> Theodore Jennings, "John Wesley Against Aldersgate," *Quarterly Review* 8.3:3-22.

<sup>7</sup> *BE Works*, 1, 42, 46-47, 57, 62-66.

ダスゲイトのウェスレーが聖化と修練を目標としていた神学を持っていたこと、また霊的には国教会の典礼の枠を変わずに大切にしていたこと、心理的な揺れ動きは継続していたことなどを理由に、突出した回心劇を否定する方向で解釈している。またマドックスのように、アルダスゲイトを大山の分水嶺として見るのではなく、ウェスレーの生涯はさまざまな霊的経験を積み重ねて複雑な神学的霊的様相を呈していた現実が、より鮮明に表に出るようになった<sup>10</sup>。

もちろん、伝統的なアルダスゲイト解釈も健在であることは事実である。その最も有力な論客は、コリンズである。コリンズは、注1に挙げた論文から始まって、**A Real Christian: The Life of John Wesley (Abingdon, 1999)** や **Conversion in Wesleyan Tradition (Abingdon, 2001/John Tyson との共編)** や **John Wesley: A Theological Journey (Abingdon, 2003)** を著して、アルダスゲイトにおける福音的回心体験が、ウェスレーとメソジストにとって、決定的な地位を占めていたことを主張している。

## II. アルダスゲイト解釈をめぐって

アルダスゲイト 250 周年を契機に、ウェスレー研究者たちを二分するほどの解釈の混乱が始まった。マドックスは、「解釈の革命」(interpretive revolution)と呼んでいるほどである。双方、急先鋒に立つ学者たちの対立は、自らの神学的なアジェンダを背景に相手の主張にやや過激に反応していることは否めない<sup>11</sup>。傍観者を装うわけではないが、こうした論争を通して、解

釈の対立が生じていると考えるよりも、むしろ、相手の主張を通して自らの歪みを是正し、自らの解釈の意義を深める契機があたえられていると思う。そこで双方の主張を行き来しながら、アルダスゲイトを解釈する必要を覚える。

1. 岩本氏の丁寧な表現をあらためて考えることにする。「それは(オールダスゲイト経験)決して低い山ではなかった。しかし富士山のように単純で聳え立つ高山でもなかった。この経験は、ジョン・ウェスリーの『長い霊的巡礼の旅路という連山』におけるすばらしい高山であったのだから……」。ここで岩本氏は、連山がアルダスゲイトの前後に存在してことを強調している。と同時に、どんなに19世紀リバイバリズム的「回心」をウェスレーに読み込むことを警戒したとしても、それで「アルダスゲイトの高山のすばらしさ」を低めるような解釈は行き過ぎではないだろうかという配慮も感じられる。ジェニングスはアルダスゲイト体験を過小評価する傾向にある。確かにウェスレーは5月24日を自らの霊的記念日とは考えていなかったし、またそのようなことをメソジストに説くこともなかった。しかしだからといって、私たちはあえてこの山を「低める」必要はないのではないか。

また逆に伝統的な回心体験という解釈を守ろうとするコリンズは、連山を発見したアウトラーに激しく食ってかかっているが、それもどうであろうか<sup>12</sup>。アウトラーが、アルダスゲイトを前後してそび

---

**Responsibility (Abingdon, 1995)** という立派なウェスレー研究書を独自の視点から記したことである。何が起こったのだろうか。解放の神学からプロセス神学に至るまで、半保守的の神学の先端を行っていた合同メソジスト教会に「ウェスレーに帰れ」運動が1980年代後半から90年代にかけて起こったと言える。もちろん、多くの神学者は自分なりのアジェンダを抱えたままウェスレーを読むようになり、以前はウェスレー・メソジスト研究に感心を寄せなかった学者も、ウェスレーと関わるようになる (**Doctrine and Theology in the United Methodist Church, ed. By Thomas Langford, Kingswood Books, 1991** を参照)。こうした背景にあって、コリンズがことさら、ウェスレーの福音的回心、新生体験を強調するのには、合同メソジスト教会内における「お家騒動」があると言えないわけではない。

<sup>12</sup> Kenneth J. Collins, "Twentieth-Century Interpretations of Aldersgate: Coherence and

<sup>10</sup> Rady Maddox, "Introduction," *Aldersgate Reconsidered*, p.13-14. 本書はこのアルダスゲイト 250 周年に出された記念論集である。

<sup>11</sup> たとえば、コリンズは歴史神学からのウェスレー研究に力を入れていたドリュー大学で学び、ジェニングスはウェスレーと解放の神学との対話研究が強いエモリー大学で同時期に学んでいる。畑が違えばそれまでだが、それ以上にそもそもコリンズは福音的保守的な背景からウェスレーを学び、ジェニングスやマドックスはさらに広い神学アジェンダとウェスレーとの接点を探っていた。

やがて火がつくアルダスゲイト解釈論争には、興味深いことに、福音的回心の体験には軸を置かない、合同メソジストの神学者たちが参入することになる。もっとも目を引いたのはプロセス神学者の筆頭にいたジョン・カブが、**Grace and**

えているいつかの山を見つけたとしても、岩本氏が述べるように、それをアルプス連山のように理解すべきであって、それをもってして5月24日の意義が減退するわけではない。アウトラーに対して批判を集中砲火のごとくに浴びせるコリンズの反応も過剰としか思えない。

2. 同時にコリンズの懸念も理解できないわけではない。それは、プログレッシブにウェスレーを理解すると、ウェスレーの福音的体験があいまいになりはしないかという問題である。確かに聖化論、修練の生活、国教会の礼典と、外側から見れば、アルダスゲイトを前後してなんの変化もなく、一貫してそれらのことに励むウェスレーを見ることができる。しかし、その一貫した部分にだけ目を注ぐと、私たちはあの英国から世界へと広がっていく「福音的信仰復興運動の起点」を見失うことになるのではないか。

メソジストの信仰復興運動の起点は、聖化論、修練の生活、国教会の礼典にあるのではなく、「救いの確かさ」にある。それは、ウェスレー自身が「**A Plain Account of Genuine Christianity**」で、神が約束された事柄が神の働きによってたましいのうちに実現していくところにあると述べているように<sup>13</sup>、キリスト教の存在証明・メソジストの存在意義を、制度や道徳や神学ではなく、心の中に神が起こされる変化に求めたからである。5月24日の『日誌』を見ても、その日に至まで彼が求めていたのは、意識的信仰、「もっていたら、もっていると明確にわかる信仰」であり、この日ウェスレーはそれを得ることによって、十字架による罪の赦しが与えられたと感じたのである。その後、それがいかに揺れ動いたとしても、最終的にはその

---

Confusion,” *Wesleyan Theological Journal* (1989) 24 WTJはネット上に古い論文を掲載している。

<sup>13</sup> 「キリスト教が約束していることが、私の魂のうちに成就された。そして、キリスト教とは、内なる原理として考えたとき、これらの約束すべてが成し遂げられることを意味する。それは聖潔と幸福、すなわち被造物の我々の魂のうちに神の像が再び刻み込まれることであり、これこそがキリスト教の真理の最強の拠り所であると私は考える」 (§ii, 12–§iii,1)。

心の中に起こされた変化が定着し、それが確証の教理としてメソジスト運動の中核的・特色的教理となった、その意義を減じることはできない<sup>14</sup>。

それが後期ウェスレーになって、薄れていったかと言えば、事実はその逆で、全き聖化のリバイバルが1762年を前後に広がっていくと、同じ聖霊の確証が、今度は全き聖化の意識的体験を通してもさらに明確に強調されるようになっていった。

しかし、この心の中に起こされる変化は、5月24日の一夜に依存するような心情的な「回心」(conversion)でなかったことは確かである。それは、「悔い改め、義認、新生、信仰、確信、確証などを包括する」(岩本 6)のものであり、良き行いや恵みの手段や聖化とのつながりも追求されるような神学的な体験としてウェスレーは整理した。ウェスレーがモラビア派的な救いの確証を求め、それを体験しながらも、モラビア派の静止主義に疑問を抱き、克蘭マーの義認と良き行いに関する説教を深く学び、モラビア派との距離を置いていったという事実は(岩本 28)、この時点ですでにウェスレーは、やがて来る19世紀リバイバルズムやホーリネス運動が描くような瞬時的かつ生活感のない信仰至上主義的な「回心体験」を警戒していたといえる。1738-40年には、こうした警戒心はモラビア派に向き、1770年代にあつては、より強烈に「信仰義認・福音主義派」を標榜するカルヴァン派のメソジストに向いていた。つまり、後期ウェスレーが距離を取りつつあったのは、「信仰義認」や「アルダスゲイト体験」そのものではなく、19世紀リバイバルズムにやがてみられるような、変形した安易な「*sola fide*」ではなかったのか。

たしかに後期ウェスレーは、アルダスゲイト以前の自分の信仰状態を再解釈している。1771年に出版された『全集』を手にしたウェスレーは、1738

---

<sup>14</sup> Heitzenrater, “Great Expectations,” *Aldersgate Reconsidered*, p.50: “On the other hand, if the event was not a watershed, why did its central feature (the experience of assurance, the witness of the Holy Spirit) become a fixture at the heart of his preaching and theology? Why did the perceptible inspiration of the Holy Spirit become a central feature of his soteriology? And why did he continue to insist upon assurance as one of the distinguishing marks of the Methodist movement?”

年2月1日『日誌』で「私は回心していなかった」との記述に、自分で「これについては定かではない」と、また「私は御怒りの子どもであった」との記述に、「そうでないと信じる」というコメントを書き加えている。1785年の説教85「自分自身の救いを全うすることについて」の説教の中で、彼は先行的恵みに救済論的意義を与え、義認の前の善き業が全的腐敗のもとにあって神の御前に価値なきものではなく、「spark of grace」として、それに応答して積極的に恵みの手段に励むことを説いている（三・6）。また1788年の説教106「信仰について」では、かつて1741年の説教2「Almost Christian」で、あと少しでキリスト者といえるような者は、今一歩で義とする信仰に決定的に足りない、未だ神によって受け入れられていない存在であると記していたのに対して、義認の信仰を持っていなくても、神を恐れ、それに応じた生活をしているのなら、そのような「しもべの信仰」を神は受け入れてくださり、御怒りは彼のうちにとどまっていないと、この点に関する論調を大きく変えてきた（一・10）。

だからといってウェスレーは、アルダスゲイトが信仰義認の体験であったこと、またその福音的回心の意義そのものを変えてきたわけではない。一辺倒な信仰義認の教理で、その教理に当てはまらない者は救われていないとばっさり切り捨ててしまうような福音的教条主義を避け（説教20「主、我らの義」）、また上記のように、信仰至上主義によって人間の行いが無意味であるかのように、誤解の種になるような表現を修正し<sup>15</sup>、神学の枠組みをさらに整えていると考える方が、自然ではないかと思う。

### Ⅲ. 体験の神学化：『日誌』5月24日

学会誌第5号の岩本論文をもって、新たに学び、考えさせられることが多くあったが、私にとって、ウェスレーが『日誌』5月24日の箇所を、いくつ

<sup>15</sup> 岩本論文は、アルダスゲイト体験直後も、自分はこれまでキリスト者ではなかった、とのウェスレーのコメントが周囲の人びとを当惑させていることを、興味深く取り上げている。特に母スザンナの手紙は、後期ウェスレーの自分自身の方向性と理解が類似している（岩本 20）。

かのメモランダムを総合しながら、時間をかけてまとめ上げた、という研究内容は重要であった（岩本7）。もともとあの箇所は、自分のたましいの遍歴を詳細に神学的に整理してつづっているの、2-3日で書いたとはどうも思えないが、それほどの時間をかけて仕上げたとは理解していなかった。岩本論文が検証しているように、ウェスレーは、モラビア派が証しする明確な救いの確証が聖書的に正しいのか、またそれをアルダスゲイトで得たと感じたにもかかわらず襲ってくる不安をどのように受け止めるべきか、また信仰による救いと良き行いや聖化との関わりをどのように考えたらよいか、たえず霊的な体験を聖書に照らし、教会の教えに照らし、そして他のクリスチャンの証しと比較してどのように考えるべきなのか、理性的な検証を繰り返して神学化していった<sup>16</sup>。

私はその時間を、ウェスレーによる「体験の神学化」の時期と捉えなおした上で、あの一日の出来事を見ていく必要をあらためて感じた。端的に言うと、その体験が何であったかということ以上に、その体験を本人がどのように解釈して神学化したかということの方が、はるかに重要なのではないかと<sup>17</sup>。体験は、本人が神学化してはじめて、永続的な意味を持つことができる。そしてそのように神学化された体験を、他人である私たちが他の神学的枠組みによって再解釈するような試みは基本的に許されていない、と。

さて、そのようにして神学化されていったアルダスゲイト体験は、どのようなものであったのか。ここはひとまず、フランク・ベーカーの言葉を引用しておくことにする。「ウェスレー兄弟の手紙も説教も賛美歌も直接的にも間接的にも、アルダスゲイトで起こった出来事を二人がどう見ていたのか、すなわち、基本的に二人はそれを信仰義認の体験として考えていたというこ

<sup>16</sup> ハイツェンライターもまた、ウェスレーによる体験の記述と、神学的省察の記述をある程度分けて考えるべきことを提唱している。その上で、神学的省察は時間をかけて、時に二転三転している（神学的遍歴）ことに注意しながら、アルダスゲイトに至るまでの時期を特に詳細に分析している。Heitzenrater, *op.cit.*, pp.51ff.

<sup>17</sup> 渡辺善太が、中田重治にはじまる日本のホーリネス運動を批判した一文の中に、以下のような有名なくだりがある。「ところが今までホーリネスの人びとの間に於いては、自己の体験の中に『ぐるぐる廻り』をし、そこをつきぬけることをせず、そしてそこに自己満足を求め、そこに快感を感じずという人間的弱点が露呈

とを、直接的にも間接的にも明らかにしている」<sup>18</sup>。私はそれが最も明確に端的に表現されているのが、彼が2年という歳月をかけて（岩本 7）時間をかけてまとめ上げた5月24日の『日誌』箇所であると考えている。ウェスレーはその中で、その日に至るまでのたましいの遍歴を3段階に分けて記している。①「律法に無知であった」（“ignorant of the true meaning of the Law”§1）少年期には、親の厳しいしつけに従うことが神の戒めを守っていることになることと理解して、表面的な正しさだけでキリスト者であると錯覚していたこと、②「己の義を立てることに熱中し、律法の下に正しくあった」（“I was now properly ‘under the Law’”§9）オックスフォード・ジョージア時期には、神の戒めの光が自分の心や思いに及んでいることに目覚め、自分自身を神に捧げ、その律法にかなうように全力を尽くしたが、結果的にそれが自分の存在全体の罪深さを明らかにすることになり、救いに絶望し、救われることに自分が全く無力であることを痛感したこと、③「恵みの下に」入り、「救われるためにキリストに、ただキリストにのみ信頼した、と感じた」日。「神が私の罪を、この私の罪さえも取り去ってくださり、罪と死の律法から救ってくださったという確証が与えられた」日。

24日の記述は、ドラマチックな表現に満ちているが、それは彼がアルダスゲイトの興奮冷めやらぬ時期にドラマ仕立てに書いた結果ではなく、パウロが描く律法と福音の対立的パラダイムの中でたましいの苦闘を経験し、やがてそこから解放されていく自分を「神学的に意識して」、ある意味で体系的に描き出そうとした結果ではないかと考えることができる。自らのたましいの遍歴を、そして24日の体験を神学的に解釈するために、ウェスレーが用いた「解釈の枠組み」は、上述のごとく3段階で描かれ、ルターのそれと酷似している「信仰義認の解釈枠」であった。アルダスゲイトの前段階であれば救いの確証を求め、また24日には「heart warming」な経験をしたことは事実であるが、5月24日の『日誌』の記述は、単なる霊的確証体験の述懐ではなく、本人による明確な信仰義認の「神学的解釈」の枠組みが入れ込まれた解説であることを認めなければならない。

せられている」（米田勇『中田重治伝』、566頁）。

つまり、それは一つの経験の日記的な解説ではなく、たましいの遍歴という素材を用いた神学的なステイトメントであると考えられる。その事実から、次の二点を提示することによって小論を終わりとする。

A) 後にウェスレーが、5月24日付けの日記に記しているような②と③の断絶を少々緩やかなものとして修正したとしても（しもべとしての信仰から子どもとしての信仰へ）、それで解釈の枠組みを変えているわけではない。ましてや②の1725年の出来事を高く評価して、それが「回心」に相当すると再解釈しているのでもない。

B) 24日付の日記が、神学的に練られた既述であるとしたら、私たちの方で自由に新しい解釈の枠組みを当てはめることは避けなければならない。たとえば、ホーリネス系の神学者たちの多くが、1725年のオックスフォードにおける献身の決意を「回心」とし、1738年のアルダスゲイト体験を「きよめの転機体験」として解釈するが、それはウェスレーが備えたのとは「別の」枠組みを当てはめているにすぎない<sup>19</sup>。

（インマヌエル高津教会 牧師）

<sup>18</sup> Frank Baker, *op. cit.*, p.75.

<sup>19</sup> W. Stephen Gunter, “Aldersgate, the Holiness Movement, and Experiential Religion,” *Aldersgate Reconsidered*, pp. 121–131.